2026_1113「１１月中旬のムラサキツユクサ」日々の理科 4478 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

職場の構内を歩いていると、植え込みの中にムラサキツユクサが一輪だけ咲いているのを見つけました。すでに 11 月中旬、秋も深まり、朝晩の冷え込みが感じられる季節です。初夏から夏にかけて盛んに咲く花なので、この時期に出会うとは思いませんでした。しかも、花弁は小さく、色も淡い紫色で、初夏に見られる鮮やかな花とは少し違った印象です。季節外れの花が、ひっそりと咲いている姿には、何ともいえない風情があります。

ムラサキツユクサは北アメリカ原産のツユクサ科の多年草で、漢字では「紫露草」と書きます。「ツユ」は「梅雨」ではなく「露」で、日本在来のツユクサに似た花を咲かせることに由来します。花弁は３枚、雄しべは６本あり、黄色い葯と、花糸に密生する紫色の細かな毛が特徴です。この毛は細胞が一列に連なっているため、顕微鏡による細胞観察の教材としてもよく知られています。

ムラサキツユクサの花は早朝に開き、昼頃からしぼみ始める「一日花」です。しかし、次々と新しいつぼみが開くため、株全体では長い期間にわたって花を楽しめます。秋になって気温が下がると、植物の成長や花の発達も緩やかになります。今回の花が小さく、色も薄かったのは、低温や日照時間の短縮などが影響した可能性があります。やがて地上部は枯れ、地下部で冬を越します。冬の訪れを前に、最後の力を振り絞って咲いたような一輪でした。

（2026 年 11 月中旬／お茶の水女子大学構内）

